

妖怪『アマビエ』



アマビエ

コロナ 退散！

新型コロナウイルスにより日本全国で自粛ムードとなった2020年2月末、あるSNSにより拡散。姿を描き写して人々に見せると、疫病の流行が妨げられると云われている。

drawn by Sasami

『四國ヘンロとは』

南 寿宏

0 『四國ヘンロとは』発行

令和2年3月21日、高知地学研究会会員小松勝記氏の考察執筆により、標記書籍が発行された。同著によれば、本書は、『善通寺教学振興会紀要』『時宗教学年報』『土佐史談』『よど』などの研究書に出稿した論文をまとめたものである。

なお、発行された3月21日は、弘法大師空海の入定の日（承和2年3月21日）である。
小松勝記考察執筆（2020）：四國ヘンロとは，pp232，株式会社富士書房発行

小松勝記

四国八十八ヶ所霊場会公認先達

高知地学研究会会員

高知県歴史民俗資料館資料調査員

四国地域史研究連絡協議会会員

著書 『南海地震の碑を尋ねて』 毎日新聞高知支局

『遍路人の笑顔』 毎日新聞高知支局

『ヘンロ道を辿る』 毎日新聞高知支局

『高知県歴史の道調査報告書・ヘンロ道』 高知県教育委員会

『四國邊路日記并四國巡拜大繪圖』 四国霊場三十七番岩本寺

『中土佐町誌』 中土佐町

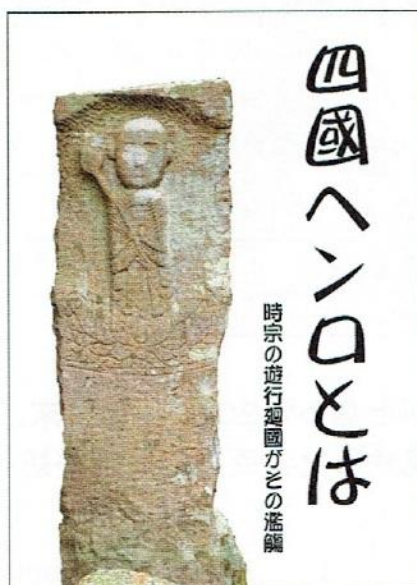
『四國遍禮名所圖繪并近代の御影・霊場写真』 四国霊場二十六番金剛頂寺

『遍禮標石 徳右衛門標石特集』 四国霊場六番安樂寺

他五冊

1 目次

本書の内容は、次のとおりである。この中から、いくつかの章を抜粋して紹介する。



高知県の中世石造物	1
上梓にあたって	3
四國ヘンロとは	5
四国遍路でよく聞かれる言葉	29
用語ヘンロの漢字表記について	35
霊場開創千二百年とは	44
足摺七里の打戻りを考察する	49
近世の一之宮について	63
捏造されたと思われる四國ヘンロ史料	91
何時から結願所と呼ばれたか	109
四國八十八ヶ所霊場の女人禁制について	119
納経に見る神仏分離期の混乱	131
四十二番仏木寺の寺地について	174
番外霊場と呼ばれるのは何時から	182
四國ヘンロと白翁山歎喜光寺	189
近世遊行上人の四國廻國	198

2 上梓にあたって

本章は、執筆者の小松氏が学会に、いわば「ケンカを売った」、実に痛快な文である。執筆者の考えが端的に表されているので、一部、抜粋する。これは、あくまでも、『小松氏個人』の見解である。

平成十年に初めて本格的に四国遍路を経験した筆者、その後も幾たびか八十八ヶ所を参拝して回り、四国遍路に関する本も複数読んできた。初めは学者の書く本ではその内容に驚嘆敬服もしていたが、複数回の遍路をしていくうちに、本の記述が遍路を実地に踏査研究したものか疑問が湧いてきた。

そこで各種の資料を集めることから始め、論文もまとめようとしてきたが、どこか論理の整合性がとれない箇所がでてきて、解決できる史料を求め続けるうち時宗にいきつき、松山宝厳寺、兵庫真光寺、京都金光寺などを訪れてご教示を戴くとともに、吉川清師が著した『時衆阿彌教團の研究』を読んだときに、これを発展的に研究すべきとの結論に達した。

時宗についての論考は後述するが、現在、四国遍路を研究していると称する大学教授達の元とするのは、日文研叢書第23号『四国遍路の研究』が多いと思われ、その執筆者の名声肩書きのみを重要視、内容については何ら検証すること無く孫引きしており、また孫引きだとしてもありえない話を披露する学者もいるが、大学教授間では問題にされないのであろうか。

このような状況では正確な四国遍路研究はあり得ないと、筆者のこれまでの研究を元に、現在その事象を裏付ける文献が見いだされても無くても、論理性のある文を記載して提供する必要性に迫られる思いで上梓する次第である。

(中略)

筆者が最も疑問に思えるのは、複数の大学で四国遍路の論文を審査する教授達が、四国遍路の経験が無いがあっても一回程度であり、全ての札所の建物も頭に浮かばない状況のままであったり、ヘンロについての文献・日記の類いをどの程度研究しているのかも疑問であるまま、学生の論文を見ていることは如何なものであろうか。このようなことがまかり通ることは摩訶不思議なことだと思える。

日文研叢書第23号『四国遍路の研究』については、そのPDFファイルを全文閲覧できるので、google等で検索されたい。

『四国遍路の研究』は200ページを超える大作であるので、浅学の私にはそれを理解するだけの知恵も知識もなく、ましてや、皆さんに紹介することは不可能。そこで、同書中の『四国八十八か所の開創者たち』から、一部を引用・紹介する。

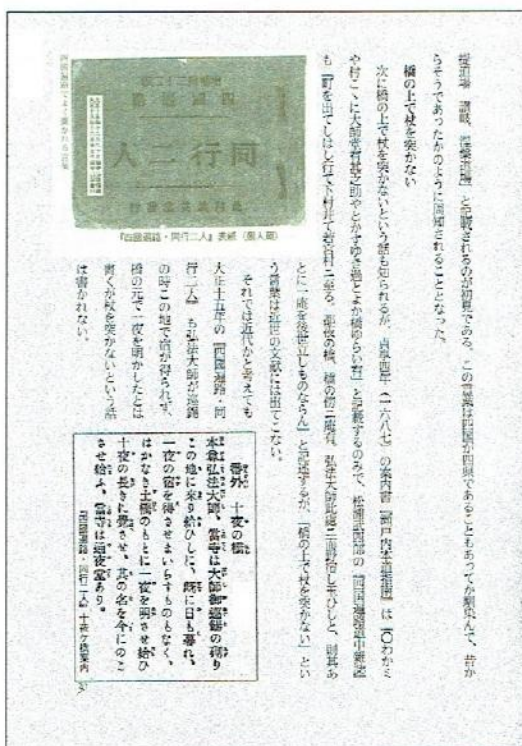
日本の各地には、神の権化であるマレビトが、年々時節を定めて村々を巡り、単調な日常生活に変化と幸福をもたらすことを期待するという考えがある。四国における『オダイシサマ』もその事例と思われるが、実在の空海と混同されて、より現実味を帯びたものとなっていった。

(中略)

さて、このように空海は、四国八十八か所の開創者としての可能性は、ほぼないといつてよい。しかしながら、今日の遍路の間に伝わっている四国八十八か所の開創者は、空海ではなく『弘法大師』である。真言宗の高祖であり、政治・経済・技術・文化などの面にも天才的な能力を発揮した『空海』と、マレビト的な性格を有した霊的な存在である『オダイシサマ』の両面を持った、いわば歴史と神話の狭間にある『弘法大師』。そうだったからこそ、四国八十八か所の開創者となり、遍路における絶対的な存在になり得たのである。

瀬富本宏 白木利幸 (2001): 四国遍路の研究, 日文研叢書, 23

3 四国遍路でよく聞かれる言葉



橋の上で杖を突かない件について。

愛媛県大洲市東大洲にある十夜ヶ橋では、その橋の上では遍路は杖を突かず、上にあげて渡るそうである。

ここは旧遍路道からいえば廻り道になるが、遍路は必ずここへお参りし、大師のご苦勞をしのぶならわした。そしてこの橋を渡るときは、遍路は杖を上にあげて、南無大師遍照金剛となえながら速足で渡るしきたりだ。なぜなら大師がこの橋の下で休まれたからであり、いまでも大師の寝姿の石像が祀ってあるからだ。

土佐文雄 (1971/6/12): 同行二人, 高知新聞,
(1972年に同社にて単行本発行)

この話は、本著に小松氏の詳しい考察があるので、是非ともご覧いただきたい。この他にも本章には、『発心・修行・菩提・涅槃』や『納札とその色』など、興味を引く話が並ぶ。

4 用語への漢字表記について



本章で小松氏は、『ヘンロ』表記を次の3つに分類する。

- ①※路・邊路・邊路
②遍路
③徧禮・遍禮

(注 ※はシンニヨウに鳥だが本会報では表記不能)

現在ヘンロを表す場合『遍路』の漢字表記が当然であるかのように、どのような場合でもこの『遍路』を用い、原典（金石文を含む）が『※路』とあっても『遍路』と翻字することがまかり通っている。

(中略)

これは漢字表記が異なれば意味するところも違うことに気付いていないと思われるのであるが、さらに漢字の意味も定義づけされていない現況には異議を唱えざるを得ない。

(中略)

この『※路』の表記は近世を通じて用いられており、近代になっても見られることは、この漢字を用いることが本来のヘンロを意味していると考えて差し支えないであろう。

左図は、智積院の僧侶、澄禪が承應二年（1653）に四國を回った記録『四國※路日記』の外題。本書p36より引用。

5 女人禁制寺院の遍路道（注 本章は、南寿宏の室戸時代の取材）

四国八十八ヶ所には2つの女人禁制寺院がある。二十四番最御崎寺および二十六番金剛頂寺（ともに室戸市）である。地元では前者を東寺、後者を西寺と呼ぶ。東寺は『とうじ』ではなく『ひがしでら』と読む。『とうじ』は京都の真言宗総本山。

東寺遍路道は誌面の都合で省略する。西寺遍路道は、『女人結界石』で国道から外れ、下図の青地の道を行く。参詣後の下りは、あるボランティア団体が道標を整備しており、その案内に従うと、道の駅キラメッセ室戸前で国道55号に出る。しかしこの道は、とんでもなく長くて脇道が多く、加えて、女人札所『行道不動』を素通りしてしまう。行道不動につながる道が本来の遍路道なので、ご注意ください。

西寺の女人禁制は明治三十二年に解かれた（東寺は明治初年）が、それまでは、女性は山に登れなかった。夫婦の遍路の場合、妻は夫が山に登っていくのを『女人結界石』で見送り、その後海岸を行道不動へ先回り参拝、夫が下ってくるのを待った。皆様も、巡礼は、夫婦で行かれ、この明治以前の巡礼の追体験をお勧めする。

なお、行道不動は空海修行の地であり、室戸ジオパークの新村遊歩道に近い。また、隣には空海遍路文化センターが建設中である。当初の予定（2019年）より遅れたが、この3月に完成する。（空海遍路文化センターの監修は西寺の坂井智宏住職）



国土地理院 HP 地形図に南寿宏が追記編集

本書には、まだまだ興味深いことが多く、紹介し尽くせないが、紙片が尽きた。続きはご自身でご覧ください。

本書の入手先

株式会社富士書房

〒780-0870

高知市本町四丁目1-46

Tel 088-873-3570

Fax 088-872-2141

頒値

1,500円（税込・送料別）

会報前号（第54号）編集後記で、次のように著した。

今、Jane Austen にはまっています。”PRIDE and PREJUDICE”に続き、”SENSE and SENSIBILITY”に取りかかっています（中野康司訳 ちくま文庫）。

前者の冒頭は、夏目漱石がその著『文學論』で絶賛したそうです。
「独りもので、金があるといえば、あとはきつと細君をほしがっているにちがいない、というのが、世間一般のいわば公認真理といってよい。（中野好夫訳 新潮文庫旧訳）」

実際に、漱石の作品の冒頭を、その英文訳とともに見てみる。

【吾輩は猫である】	
吾輩は猫である。名前はまだ無い。 どこで生れたかとんと見当がつかぬ。	I am a cat. But I have no name, yet. I have no idea where I was born at all.
【坊ちゃん】	
親譲の無鉄砲で、小供の時から損ばかりしている。	Because of genetic imprudence, I have been always a loser since my childhood.
【草枕】	
山路を登りながら、こう考えた。 智に働けば角が立つ。 情に棹させば流される。 意地を通せば窮屈だ。 とにかくに人の世は住みにくい。	As I walked up the mountain road, I suddenly noticed. If you follow your wisdom, you will be fallen out with others. If you follow your heart, you will be swept along. If you follow your will, you will be cramped. The world of mankind is an irritated place to live in.

このように、漱石は職業作家として、読者の購買判断が作品の冒頭に係っていることを重く視、重要さを理解し得た作家であった。

しかるに、我らが万葉集の冒頭はどうなっているのか。

籠毛與 美籠母乳 布久思毛與 美夫君志持 此岳尔 菜探兒	
籠もよ み籠もち 掘串もよ み掘串持ち この岳に 菜摘ます兒	
こもよ みこもち ふくしもよ みぶくしもち このをかに なつますこ	
家吉閑 名告沙根 嘘見津 山跡乃國者 押奈戸手 吾許曾居	
家聞かな 名告らさね そらみつ 大和の国は おしなべて われこそ居れ	
いへきかな なのらさね そらみつ やまとのくには おしなべて われこそをれ	
師吉名倍手 吾己曾座 我許曾者 告目 家呼毛名雄母 万葉集 卷一	
しきなべて われこそ座せ われこそは 告らめ 家をも名をも 1	
しきなべて われこそませ われこそは のらめ いへをもなをも 雄略天皇	

『こもよみこもち』から『はやみこみち』を連想するのは、筆者だけだろうか。

閑話休題。この歌は、初句から、3・4・5・6語と、古墳時代の歌の様式を持っているが、雄略天皇作というのは伝説であろう。天皇の御製と云われるのは權威付けと思

われる。巻二の冒頭歌が仁徳天皇の皇后である磐姫の御製と云われるように。なお、この磐姫の歌はやきもちの極みであるが、本稿では触れない。

さて、この雄略天皇作と伝わる歌は、いわゆるナンパの歌なので、軽く訳しておく。当時は、『名を聞く』イコール『求婚』であった。

ちいーす そこの籠もってるかのじょおー 串もってるかのじょおー なっばつんで
どこ住んでんの？ 名前なんていうの？
ここはね 日本はね 僕ちゃんのなの 僕ちゃんが一番偉いの
僕言っちゃうよ 家も名もね だーかーら あーそーば ぽんぽ ぽおーん

本稿は万葉の地学である。この歌には地学の要素がないので、次の歌に移る。舒明天皇による国見の歌である。国見というのは、為政者の重要な国家行事で、今でいう視察にあたる。

山常庭	村山有等	取與呂布	天乃香具山	騰立	國見乎為者
大和には	群山あれど	とりよろふ	天の香具山	登り立ち	国見をすれば
やまとには	むらやまあれど	とりよろふ	あまのかぐやま	のぼりたち	くにみをすれば
國原波	煙立龍	海原波	加萬目立多都	怜※國曾	蜻嶋
国原は	煙立ち立つ	海原は	かまめ立ち立つ	うまし国ぞ	蜻蛉島
くにはらは	けぶりたちたつ	うなはらは	かまめたちたつ	うましくにぞ	あきづしま
八間跡能國者 大和の国は やまとのくには					万葉集 卷一 2 舒明天皇
(※は『りっしんべんに可』で表現不能)					

この歌の問題点は、香久山の上から海面に浮かぶかもめが見えるかという点にある。何？遠いから見えない？いや、距離ではなく、標高の問題である。海が見えたら、そこにはかもめがいて、想像できるから。

奈良から近い海というと、西の大阪湾であるが、西には生駒・金剛山地（標高1,125m）がそびえる。奈良桜井盆地は大和側の流域にあたり、川の流れる北西方向（JR大和路線が通過）を見れば大阪湾が望めるかも、と思っても、その手前は葛城山（標高959m）である。一方、我が香久山は152m。

東・南・北の方角は山また山で、全くの問題外であると思われる。しかし、ここで問題になるのが、琵琶湖である。香久山から琵琶湖は見えるのか。その答えを与えてくれるのが、次の額田王の歌である。



味酒	三輪乃山	青丹吉	奈良能山乃	山際	伊隠萬代
味酒	三輪の山	あをによし	奈良の山の	山の際に	い隠るまで
うまさけ	みわのやま	あをによし	ならのやまの	やまのまに	いかくるまで
道隈	伊積流萬代尔	委曲毛	見管行武雄	數々毛	
道の隈	い積るまでに	つばらにも	見つつかむを	しばしばも	
みちのくま	いつもるまでに	つばらにも	みつつかむを	しばしばも	

見放武八萬雄	情無	雲乃	隠障倍之也	万葉集 卷一 17 額田王
見放けむ山を	情なく	雲の	隠さふべしや	
みさけむやまを	こころなく	くもの	かくさふべしや	

上の歌は、都を近江の国に遷すときに額田王が奈良山で詠んだものである。

奈良山（京都と奈良の境、JR平城山（ならやま）駅がある）を過ぎると三輪山（標高466.9m）は見えなくなる。ましてや、琵琶湖から香久山（標高152m）が見えようか。

この問題は、古来より万葉学者を悩ませてきたと見え、いろいろな解釈が生まれた。

久松潜一	これを鴨と見るかどうかにも説がある。それは、海原を海と見るか湖や池をもさすかということとも関連する。鴨は一般に池などにいる。海原を埴安池（はにやすのいけ）と見れば鴨と解するのがよい。もし遙かに海が見えるとすれば鷗の方がよいが、ここでは実際には海は見えないはずである。
伊藤博	奈良なるヤマトには「海」がない、したがって「かまめ」が舞うのは不思議だとする視野に立つ者には、この古代特有の詩想は理解できないのではあるまいか。天皇は奈良なるヤマトの池どもを「海」と見、そこに舞い立つ白い水鳥を「かまめ」と見たのであろう。そのように思い見たからこそ、「うまし国ぞ」と称揚された末尾の「大和」は、陸と海とによって成る“日本国”全体の映像をになうことになった。
中西進	大和には海はなく、低い香久山に登っても海は見えない。それで、この歌は、かつて存在した埴安池（はにやすのいけ）という考えもあるが、ここも前歌とおなじく、修飾辞をもつ全大和の意識から歌われているので、まさに洋々たる海原を幻視している王者の歌である。
上野誠	海原にたくさんの鳥が集まって、鳥が飛び立っているということは、恐らくそこにはたくさんの魚がいることを表しているのだろう。そして、それは平和を象徴する景色といえるだろう。つまり、実際の景色を歌っているわけではないのである。「豊かな国ですよ」ということが言いたいわけであるから、やはり心の眼で見たと考えるのが、良い解釈であろう。ここで描かれた景色は、理想の国土なのである。

この考えをどう捉えるかは、皆さん一人一人におまかせする。

最後に、次の仮説を紹介する。

天香久山は天上界にある空想上の山で、香久山は地上界の山。舒明帝は地上界の香久山に登ったのだが、そこを天上界の天香久山と見立てて、この歌を詠んだのである。
--

この説は、何かの本で読んだのだが、探し出せない。したがって、出典不明で誠に申し訳ないのだが、とても魅力的な説と思うので、あえて紹介する。如何。

大和三山、つまり、畝傍山、耳成山、香久山は、奈良桜井盆地に単独に突き出た3つの独立峰である。その生成には、火山である三山の地質学的・岩石学的性質が関係してくる。（単独で3つという点に可笑しいと思う人、それはあなたの気のせいである。）

三山の地質学的・岩石学的性質については、次号で詳しく紹介する。

久松潜一（1976）：万葉秀歌（一），58－64，講談社学術文庫

伊藤博（2005）：萬葉集釋注一，44－52，集英社文庫ヘリテージシリーズ

中西進（2012）：万葉の秀歌，24－25，ちくま学芸文庫

上野誠（2012）：はじめて楽しむ万葉集，27－30，角川ソフィア文庫

ジオロジー鉄道の旅 後免編（その2）

南 寿宏

5 TE20領石通

とさでん交通電車の折り返し点。紀貫之船出の地の候補。貫之は、帰京にあたって、道中を土佐日記として著した。その冒頭は次のとおり。

男もすなる	日記といふものを	女もしてみむとて	するなり
男の人がするとお聞きする	日記というものを	女の私もしてみることに	しよう

助動詞『なり』には、終止形に接続する伝聞『なり』と連体形に付く断定『なり』がある。前掲文にはその両方が載っており、古文文法で必ず出てくる。

なお、ここでは、紀貫之は、女性として、この文を記している。

承平5年（934年）12月、土佐の国守としての任期を終えた紀貫之は帰国の途に就く。国府から関（領石通の字名）まではほぼ直線。その名残は現地で見ると一目瞭然。また、右図でも確認できる。

大原則「古代から道は変わらない」

大津まで船で移動したという説（浜田春水（1964））もある。浜田説なら、国分川移動となる。大津までは小さい船で、大津で大きい船に乗り換えたか。



浜田春水（1964）：大津考 土佐史談，No.106，p1－8

紀貫之船出の問題は、彼はどこから船に乗ったかであり、古来より議論された。候補地点は2つ、関と舟戸。関は領石通電停、舟戸は舟戸電停の最寄り。

鹿児島といふ所に、守の兄弟、また、こと人、これかれ酒なにと持て追ひ来て、磯に下りゐて、別れがたきことをいふ。

船が出港してすぐ、鹿児の崎で、酒やなんかを持って、見送りの人が岸を追っかけてきた。すると船は停まり、皆は磯におり、別れがたいと言う。そして酒盛りが始まる。いかにも酒好きの土佐人らしいエピソードなのだが、このことから、乗船が鹿児島というのではなく、関と舟戸の間となる。詳しい論証は次号に譲る。

934年当時の浦戸湾の海岸線想像図は 右図のとおり。大津はまさに大きい津（港の意）である。当時の浦戸湾は、今よりはるかに広く、紀貫之の乗った船が大島（五台山）の北か南かどちらを通ったかは不明である。浦戸湾はその後、国分川、下田川等による砂泥の堆積、堤防設置により、陸地化されたが、今でも海面以下地は多く残っている。これを0メートル地帯という。五台山が0メートル地帯によって囲まれていることは、国土地理院地形図から明瞭。

（地形図は本号p12に掲載）



※※※ は浦戸湾7島
現在も島なのは五島のみ
大島は現在の五台山

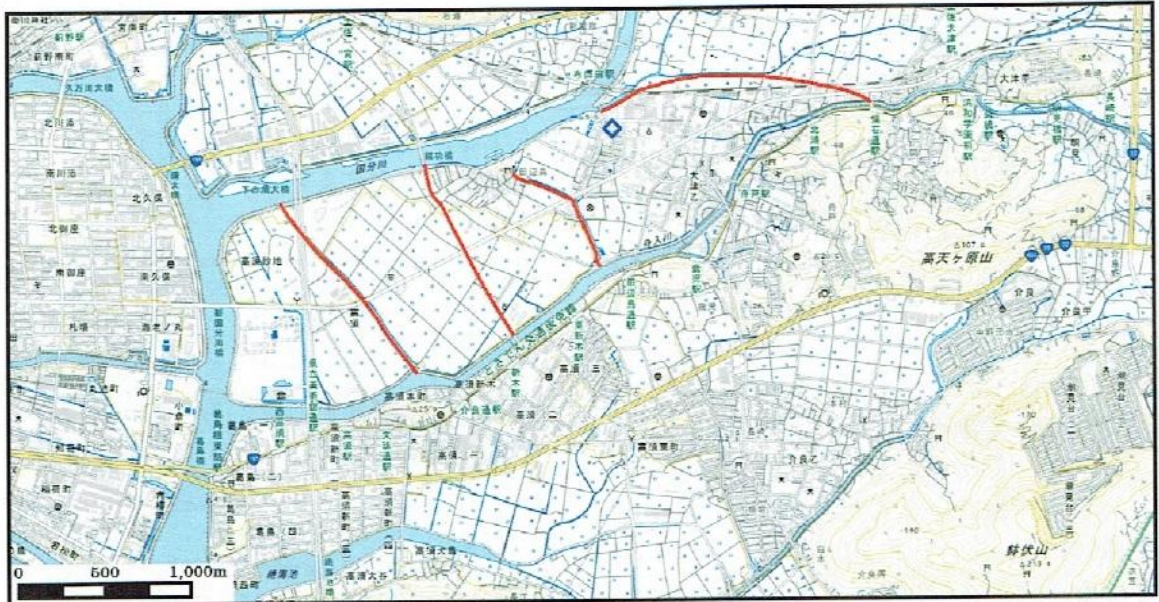
二重町防災圏図より南編集
赤線は紀貫之の帰京ルート予想図

6 TE19北浦

駅名は歴史の化石である。地名は地元自治体の権限により変更が比較的容易であるが、駅名は運輸省・国土交通省の手続きが複雑だから。

北浦という停留所名は、まさに、その北に海が広がっていたことを示す。

この停留所は、いわゆる『ノーガード電停』であり、道に白線が引かれているのみである。東行電車から下車の際には、注意が必要である。道に不慣れな運転手が多い4月は特に注意。私は2回、はねられかけた。



高知市高須～大津の国分川・舟入川間の中堤

国土地理院HPに南寿宏加筆

赤線が中堤 ◆は大津西塩田公園

当時の為政者（長宗我部・山内あたりか）は、浦戸湾を干拓するため、湾内に堤防をいくつか建築した。この干拓堤防を中堤（なかづつみ）という。陸地の中にある堤防だからである。国分川と舟入川を結ぶ中堤は、上図のように、4本確認される。そのうちの1本を観察する。

北浦で下車、北に、舟入川・大津バイパス・JR土讃線の順に横切る。田の中に一筋の小道がある。これが中堤である。水田より2～3メートル高くてほぼ平坦な、歩きやすい道である。堤防の北東側（陸側）に水路があることに注意。

しばらく行くと、国分川にぶつかる。そこには、ポンプ場がある。堤防内にたまった水を川に出すためのものである。中堤にはポンプ場が付き物である。

なお、中堤の西端に近い高知市大津乙には、高知大津西塩田公園（右図）がある。このことから、干拓地は、当初は塩田として使用されている可能性が示唆される。浜田春水（1964）は、舟戸近くの治部塩田など、当地の成り立ちを暗示する地名を複数個、記す。

なお、右写真は google street view から。



浜田春水（1964）：大津考 土佐史談，No.106，p1－8

7 TE17鹿児

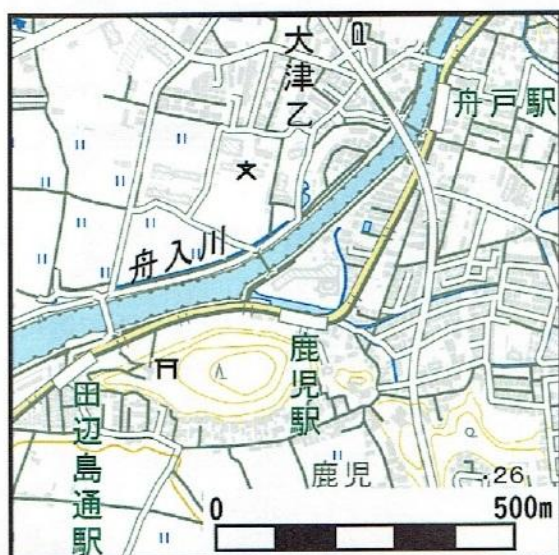
『かこ』は、今は『鹿児』であるが、昔は『水主』と書いた。鹿児は古い地名で、紀貫之の時代からあった。貫之を運んだのは、鹿児に住んでいた水主である。

(『か』は楫(かじ)、『こ』は人の意) 船をこぐ者。ふなのり。すいふ。(広辞苑第六版)

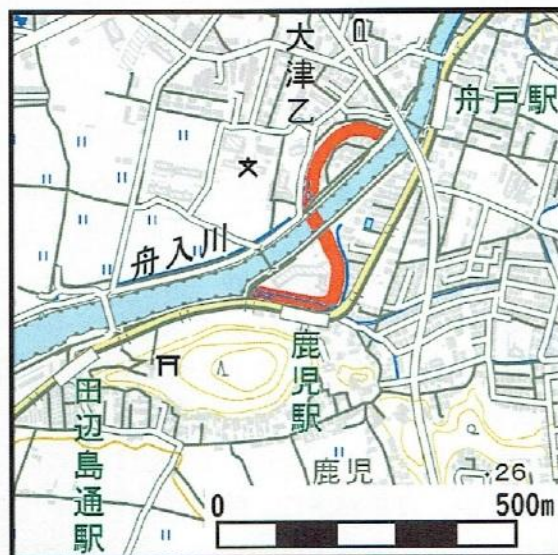
停留所のすぐ東で線路は急カーブを描く。プラットフォームの東端が削られているのは面白い。車体の長い電車を通すために、削ったのだろうか。

停留所前には、高知城東病院がある。地形図を見てみよう(下左)。病院敷地のすぐ東に、水路の存在することが示される。その川をはさんだ北側には、水路を延長する位置に黒実線(細道)が観察される。このことから、過去の舟入川の蛇行が考えられる(下右に予想水路を赤で彩色)。この考えが正しければ、病院の敷地は、かつての河川敷であったことになる。

時間があれば、鹿児～舟戸間の旧河道をたどってみたいものだ。



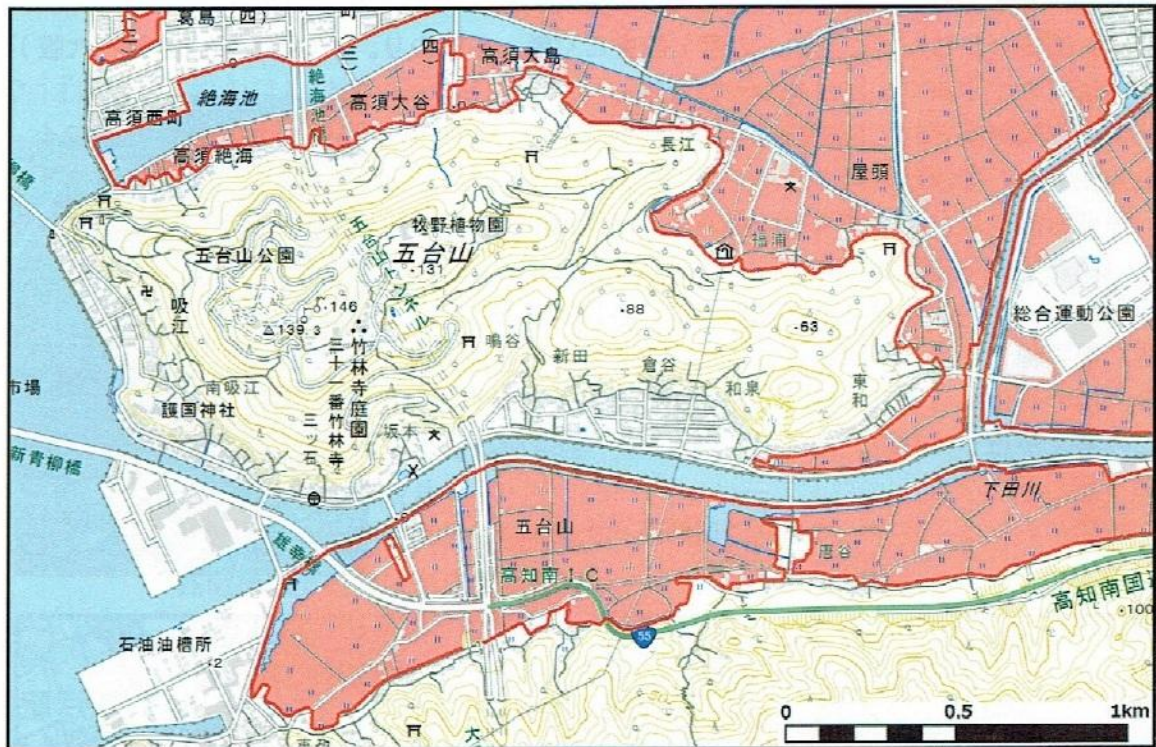
鹿児周辺地形図
(国土地理院HPに加筆編集)



鹿児周辺地形図
(赤は蛇行跡予想)

とさでん交通後免線 停留所コード一覧(南寿宏・私案)

TE01	デンテツターミナルビル前	TE09	西高須	TE17	鹿児	TE25	小籠通
TE02	菜園場町	TE10	県立美術館通	TE18	舟戸	TE26	篠原
TE03	宝永町	TE11	高須	TE19	北浦	TE27	住吉通
TE04	知寄町一丁目	TE12	文珠通	TE20	領石通	TE28	東工業前
TE05	知寄町二丁目	TE13	介良通	TE21	清和学院前	TE29	後免西町
TE06	知寄町	TE14	新木	TE22	一条橋	TE30	後免中町
TE07	知寄町三丁目	TE15	東新木	TE23	明見橋	TE31	後免東町
TE08	葛島橋東詰	TE16	田辺島通	TE24	長崎	TE32	後免町



■30年ほど前、国土地理院の25,000分の一地形図に着色して、海拔0メートル地帯を表示したことがありました。その国土地理院地形図は、現在はHPで閲覧できます。

<https://www.gsi.go.jp/>

この地形図は、windows の描画ソフト『ペイント』を使うことで、パソコン上で編集できます。上図は、五台山周辺の0メートル地帯を赤で着色したものです。

根気が要りますが、とても楽しく作業できます。

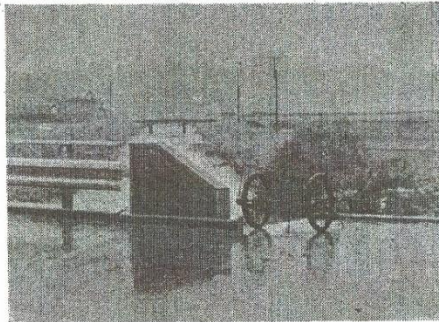
■本号掲載予定の『土佐日記船出の地の考察と浦戸湾干拓の歴史』は、準備をしていましたが、資料が多く、時間切れとなりました。もう少しお待ちください。

■令和3年度総会・講演会は、現時点では開会不可能です。ご了承ください。詳細は、追ってお知らせします。

令和2年度会員数（令和3年2月28日現在）

正会員	大学生会員	中高会員	小学生会員	家族会員	名誉会員	合 計
19	1	0	0	2	2	24

行き暮れ



土佐 文雄

目行二人

55

「行き暮れ」は、土佐文雄氏の代表作である。この作品は、戦後の日本社会を描いたもので、主人公の苦悶と希望の対比が印象的である。物語は、戦後の荒廃した社会を背景とし、主人公の生活の断片を通して、社会の矛盾と個人の苦悩を表現している。土佐文雄氏は、この作品を通じて、戦後の日本人の心の内面を深く掘り下げ、読者に強い印象を残している。

「行き暮れ」は、土佐文雄氏の代表作である。この作品は、戦後の日本社会を描いたもので、主人公の苦悶と希望の対比が印象的である。物語は、戦後の荒廃した社会を背景とし、主人公の生活の断片を通して、社会の矛盾と個人の苦悩を表現している。土佐文雄氏は、この作品を通じて、戦後の日本人の心の内面を深く掘り下げ、読者に強い印象を残している。

「行き暮れ」は、土佐文雄氏の代表作である。この作品は、戦後の日本社会を描いたもので、主人公の苦悶と希望の対比が印象的である。物語は、戦後の荒廃した社会を背景とし、主人公の生活の断片を通して、社会の矛盾と個人の苦悩を表現している。土佐文雄氏は、この作品を通じて、戦後の日本人の心の内面を深く掘り下げ、読者に強い印象を残している。

4段の冒頭2行は不鮮明につき付記